イソップ東漸—ロバート・トームと
『意拾壢言』

内 田 慶 市
イソップ東漸—ロバート・トームと
『意拾喩言』

内田慶市

はじめに

いわゆる近代中国の「西学東漸」は、明万暦十一年（1583年）に来華したマテオリッチ（Matteo Ricci、中国名利瑪竇、1552—1610）に始まると言われる。この「西学東漸」の主要な担い手であった宣教師達は中国にキリスト教とヨーロッパの近代科学をもたらしたが、実はその中に「イソップ」も含まれていた。彼らは「聖書」と「イソップ」を携えて中国にやってきたのである。

戈1983はH. Bernard の『Le Père Mathieu Ricci et la société de son temps (利瑪竇神父傳)』（1937）を援用して次のように述べている。

当時のイエズス会士たちは東方に布教にやってくるときには、みな「イソップ寓話」を携えており、しばしばその中の寓話を引用して、モラルを説いたのである。織化行（Bernard, R. P. Henri—筆者）の『利瑪竇傳』には「ある一人の役人がイエスの事跡を述べた小册子に見入っているのを見て、私は、これは我々の教えに使うものだから差し上げられないと言、代わりに一冊のイソップを贈った」とある。（230p）

このことは、遅れてやって来たプロテスタント宣教師においても同じことが言えるようである。たとえば、『Chinese Repository』（Vol. VII No. 8, Dec. 1838）には次のような記述が見られる。

Another kind of publication, very acceptable to the Chinese, is the short tale, covering a moral lesson, or reflection, such as the excellent fables of Aesop.
（中国人に受容されうるその他の出版物は、教訓や思想を含んだ、たとえばイソップの優れた寓話のような短い物語である）

イソップの中国語版は現在までコレリッチの『時人十篇』（1608）に採られた数編が最初のものと認められ、まとまったものとしてはトリゴー（金尼閣）の『況義』（1625）が知られているが、中国語訳イソップの流れの中で、その中国語の質、量、普及の度合い、またその中国語学研究史上における価値等々どれをとっても他の圧倒しているのがトームの『意拾壈言』である。本稿ではトームの『意拾壈言』とその周辺の問題について論じてみたい。

１．ロバート・トームその人

『意拾壈言』は、1840年に「The Canton Press Office」とから出版されたもので、その扉には「意拾壈言 ESOP’S FABLE WRITTEN IN CHINESE BY THE LEARNED MUN MOOY SEEN-SHANG, AND COMPILED IN THEIR PRESENT FORM (with a free and a literal translation) BY HIS PUPIL, SLOTH.」とある。

（「博学なる愚味先生によって中国語に譯され、そのものぐきな生従によって意訳と直訳付きの現在の形に編集された意拾壈言」）

四つ折り判の大きさで、献辞（1p）、Errata（1p）、英文の Preface（3p）、英文の Introduction（19p）、Remarks（6p）、英文の目次（2p）の後に、中国語の「叙」と「意拾壈言小引」が3p、さらに References and Explanations（1p）、そして本文が104p というのが全体の構成である。

いま「MUN MOOY SEEN-SHANG（愚味先生）」はさっておき、「HIS PUPIL, SLOTH（そのものぐきな生従）」という特異な呼び名で自称する編者は英国人ロバート・トーム（Robert Thom）である。

トームの経歴に関しては、Freeman Hunt の『The merchants' magazine and commercial review』（No. IV, Vol. XVI, April. 1847, 381p—383p）の「Mercantile Biography—The late Robert Thom, British Consul at Ningpo」に詳しい。これは『Glasgow Chronicle』に掲載されたトームの追悼記事を
引用する形で彼の略伝を述べたものである。また、『支那叢報』第8巻解説（1942）も恐らくはこれを元にしたと思われるが、補足されている部分もあり有益なものである。

いまこれらによって、トームの生涯について概観しておく。

ロバート・トームは1807年8月10日、グラスゴー（Glasgow）で生まれた。商業に志し、少年時代をグラスゴーで1年、リバプールで5年間商店の従業として過ごす。その間、文学にも目覚め、数々の新聞への常連の投稿者であった。1828年6月、ペネシュラの首都カラカスに渡り、3年間商業に従事した。

そこで彼はスペイン語を完全に習得する一方、カソリックの聖職者との友好的な討論や仕事面での驚くべき才能によってかなりの名士になったという。その後、メキシコに1年半滞在した後、1833年8月に英国に戻った。1833年の7月、フランスのボルドーに渡り、そこを経由して1834年2月、中国（広東）の地に足を踏み入れた。それから2度と祖国に戻ることはなかったのである。

広東ではジャディン・マセソン商会（Messrs. Jardine, Matheson & Co., 怡和洋行）の商館で活躍したが、中国の言語と文学に精通するため余暇や休息の時間を中国学習に充てたという。その結果、広東滞在2年にして、相当流暢な中国語を話せるようになっていた。たとえば1837年にモリソン（John Robert Morrison, モリソンの次男）やギュツラフ（Gützlaff）不在の際に、彼らに代わってエリオットを助けて中国語と「官話」によって折衝に当たったことからも、その実力はうかがえる。また当時広東で発行されていた新聞や雑誌に投稿や記事を書き続けたという。

アヘン戦争勃発後は英国軍属となって広東、舟山、鎮海、澳門と奔走する。

1841年10月から1842年5月までの鎮海での民政管理は彼の数々の経歴の中でも特に高く評価されている。それは中国人によっても賞賛された。Elipoo（両江総督の伊里布）は1842年8月、南京で彼を紹介された時、彼によびかけてこう言ったという。「La-pih-tan（Robert Thom）私はあなたの鎮海での市民管理に感謝します。そのことであれば中国では偉大な名声を得ています。」

南京条約および追加条項の締結においても、ギュツラフ、モリソン等と共に
通訳として活躍しその貢献するところは大であった。
こうした功績、手腕は英国政府の認められるところとなり、1844年5月5日
寧波の初代英国領事を任命された。
しかし、すでに病魔がもともと頑丈ではなかった彼の体を一層蝕んで
た。それ以前から発熱を繰り返していたが容易には回復せず、ついには水腫を
併発する。願いによって休験の許可を受け入れられたが、後任の到着までは自
分の職場を離れようとはしなかった。そして、その到着を待つ間に、死が彼を
追いこした。1846年9月14日、彼は任地で殲れたのである。享年満39歳であっ
た。
トームの『意拾箋言』以外の著作には以下のようなものがある。
(1) "王敬義百年長恨 Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han or The
lasting resentment of Miss Keaon Levan Wang, a Chinese tale: founded
on fact" (The Canton Press Office, 1839)
これも「Sloth」のペンネームで出版された。『今古奇覧』や『情史』などに
も収められている有名な白話短編小説の英訳であり、豊富な注も付けられてい
る（本文66ページ、挿絵1枚）。その序に「Canton 25th December 1838」とあ
る。なお、本書はその後1846年にAdolf Bottgerによってドイツ語にも翻訳さ
れている。
(2) "華英通用雑話、上巻 Chinese and English Vocabulary, Part I" (1843?)
同じく広東で出版された英漢対訳語彙集（会話付き）である。正確な出版
年は不明であるが、巻末に著者の英文の謳歌があり、そこに「Canton 10th
August 1843」とある。内容については、詳しくは拙稿1997を参照。
なお、本書には付録として後に、何故か墨海書館蔵板『聖經史記』（論若瑟之來歴の
論若瑟幼時冤枉一第十四章から論雅各伯之死一第十八章まで）が付く。齋藤希
史氏のご好意によりコピーを頂いたハーバード大学 Houghton Library 蔵本も同じである。
(3) "The Chinese Speaker, Part I (正音撮要 上巻)"（寧波華化聖經書
房，1846）
NOTICE—Just published and for sale at the Canton Press Office.
“The lasting resentment of Miss Keon Levan Wang.” A Chinese tale, founded on fact; translated from the Original by SLOTH. In one volume, on foolscap paper, price One Dollar. (No. 233)

FOR SALE—At the Canton Press Office, ESOP’S FABLES, in Chinese with a free and a literal translation into English, by SLOTH, price $2 a Copy. (No. 246)

Looking at the Engraving of the Treaty of Nanking (from Platt’s picture), Mr. R. Thom’s portrait will be observed. He is the only...
European who is represented sitting at the Table.

この南京条約の時の写真は一枚しか知らない。1842年8月29日の例のイギリス軍艦コーヌウォリス号上での「集合写真」である。それを見ると、確かに真ん中のテーブルの向かって右に一人のヨーロッパ人が座っている。たぶん恐らくはこれがトームなのだ。

なお、トームの著作は全て、このDavid Thomによって各図書館に寄贈されたものであろう。もちろん私がこれまで見ることができたものだけだが、いずれにも「Davis Thom より～へ」という署名が入っている。

David Thomとトームの関係については、トームの兄の可能性が大である。まだ断定はしかねるが、Allibone『A critical dictionary of English literature and British and American authors』(1891)やBoase『Modern English Biography』(1965)に収められているDavid Thomがその人であると考えられる。それらによる10)と、1795年前後にグラスゴーに生まれ、リバプールの教会の牧師であったという。トームよりも12歳年上ということになる。実はハーバード大学ホートン図書館（Houghton Library）の「The Philip Hofer Collection」に収められている『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』にはHoferの手になると思われる書き込みがあり、それには次のように記されているのである。

Robert Thom, Br. Consul at Ningpo is the translator. D. Thom was his father.

しかしながら、David Thomの文書ではトームのことを「brother」11)と呼んでおり、父親ならば自分の息子を「brother」とは称きないだろうから、Hoferの書き込みには問題があると思われる。

2. トームの中国語学研究

かれの中国語に関する知識は相当なものであり、貿易商や外交官であると同時に、一方では当時、有数の中国語学者であった12)。『意拾略言』のIntroductionは文字学、文体論、文法学を簡潔に述べた中国語概論とでもいうべき
イゾップ東裔～ロバート・トームと「意拾喩言」（内田）

ものである。特に、そこでの「官話」の分類などはまさに注目に値する内容である。それはある面では、それ以前のマーシュマン（Marshman）やモリソンを同調していると思われる。また彼の研究はその後の中国語学にも大きな影響を与えている。『意拾喩言』の内容に入る前に、ここでは特に彼の「中国語（その文体）の分類」について述べておく。

トームは、中国語を先ず「文字」（Written Language）と、「言語」（Spoken Chinese）の2つに大別する。

「文字」はまた「寫法」あるいは「手寫」とも表されるが、それは更に次のように分類される。

Ⅰ．古文（ancient literature）

(1) 經書, (2) 古詩

Ⅱ．時文あるいは世文（modern literature）

(1) 文章（fine writing）……最も優れた「文章」は漢代のもの。また、「文章」は「世文之首（the very head of Modern Literature）」と呼ばれる。

(2) 詩賦（Poetry, Songs, Ballads &c, &c. not ancient）……最も良い詩は唐代のもの。

(3) 諭詔（Edicts from the Emperors or the Mandarins to the People）

(4) 書札（embracing all the different styled of correspondence）

(5) 傳志（all History, and Historical Novels of the first order）……『三國志』や『列國傳』の類。

(6) 雜録（which in opposition to the wan chang（called as stated above the very head of Modern Literature）is styled 時文之末 or the dregs-being the easiest and humblest style of composition. Under this head are included all silly novels and trash of stories, —and we must add, that, the humble work now laid before the public-claims no higher classification than as belonging to the dregs of Chinese Literature!）……『意拾喩言』はまさにこの「雑録」に入ることになる。つまり、「時文之末」であって、「文章」の対極にあるもの。文の最も簡単で粗野なスタイルである。
「言語」(Spoken Chinese) はまた「説法」とか「口説」とも呼ばれるが、大きく「官話」(Mandarin Language) と「郷談」(local dialect) に分けられる。

「官話」は更に 2 つに分けられる。

(1) 「北官話」……また「京話」あるいは「京腔」とも呼ばれる。簡単に言えば、北京のことばである。
(2) 「南官話」……また「正音（true pronunciation）」あるいは「通行的言葉 (language of universal circulation)」とも呼ばれる。これが正式な「官話」であり、また南京で話されることばである。

また、「北官話」の言葉を反映したものとして『紅樓夢』『金瓶梅』『正音撮要』『聖諭』をあげるし、「南官話」の特徴として「入声」があり、いわゆる多くの中話はこの「南官話」で書かれていると指摘している。

「郷談」については、種類が多すぎて全てを説明するのは不可能とし、康熙字典の「郷談豊分南北、每郡相際便不同（郷談は単に南北で異なるだけでなく、隣り合わせの村ですらも同じではない）」という一節を引用して、その複雑さを述べている。ただ、広東語と福建語については少し詳しい説明を加えている。

トームのこのような分類に対して、たとえばモリソンも「官話」には言及するがこれほど詳しくはない。モリソン1815では次のように述べられているだけである。

What is called the Mandarin Dialect, or 官話 Kwan hwa, is spoken generally in 江南 Keang-nan, and 河南 Ho-nan, Provinces, in both of which, the Court once resided; hence the Dialects of those places gained the ascendancy over the other Provincial Dialects, on the common principle of the Court Dialect becoming, among People of education, the standard Dialect. A tartar-Chinese Dialect is now gradually gaining ground, and if the Dynasty continues long, will finally prevail. There is no occasion to suppose it a “Royal Dialect, fabricated on
purpose to distinguish it from the vulgar." Difference of Dialects arise gradually without art or contrivance!

("Dictionary of the Chinese language, in three parts" Vol. 1–Part 1, X)

またトームの後の、たとえば Williams は『A syllabic dictionary of the Chinese language』（1874）で次のように述べるが、明らかにトームを踏襲していると思われる。

In this wide area, the Nanking, called 南官話 and 正音 or true pronunciation, is probably the most used, and described as 通行的話, or the speech everywhere understood. The Peking, however, also kown as 北官話 or 京話 is now most fashionable and courtly, ……

ところで、このような分類はトームによれば、「我々の師である藻味先生による分類」ということであるが、これより先にトームが「不完全である」と批判する M. de Guignes（に依るという）の分類もトームが言うほどには劣っていない。Guignes (1721–1800) といえば、プレマール (Prémare) を剽竊したことで悪名高いフールモン (Fourmont) の門下生であり、彼の中国語学に対する見解はおそらくそれらの流れの中にあると考えられる。すなわち、この Introduction の前段は、トーム以前の中国語分類の総まとめと見ることもできる。そこで述べられている、「古文」「文章」「官話」「鄉談」の分類のうち、とりわけ「文章」と「官話」に関する記述は見るべきものがある。

たとえば、「文章」と「官話」について次のように説明される。

「文章」は「古文」ほど簡潔ではない、「より飾られた」もの。この場合「死」「活」「虚」「實」という文字の精妙な区別が必要である。しばしば「時間」や「数」を表す「particle」131)が用いられる。「文章」はあくまでも「書かれる」とので、「会話」には用いない。

これに対して「官話」は、「文章」よりも冗長であり、話す人の個性、迫力、明快さを帯びる。「同義語」「前置詞」「後詞」あるいは「particle」が多く用いられる。このことで「官話」は意味が明確、具体的になる。しかし、「官話」は「書面語」ではほとんど用いられず、「会話」にのみ用いられる。従っ
一覧大学『文学論集』第49巻第1号
て、中国語における「口語」には2つのが方法しかない。「官話」か「郷談」である。「官話」は北京、広東、あるいは他の都市でも通用するが、特に江南地方の人がそれをうまく話す。

これは中国語の文体の特徴をかなりの程度まで言い当てているように思われる。ただし、このようなGuignesやトームの分類の中国語学研究上の正確な位置付けは今後の課題にしておきたい。

いずれにせよ、トームのこのような優れた中国語学の見識を背景にして、漢訳イソップ『意拾喩言』は生まれたと言える。

3.『意拾喩言』の内容と特徴

本書が作られた目的は、英文Prefaceや中国語の「叙」によれば、当時「欧米人が中国語を学ぶため」の適当な入門書がなかった（蓋吾大英及諸外國、欲習漢文者、苦於不得其門而入）ことによる。つまり、あくまでも、欧米人の中国語学習用テキストということであって、これまでの宜教師の立場とは少し違っている。

収められている寓話は全部で82話（各話には番号がふられており、最後は81になっているが、31と60の番号が重複している）で、中央に横書きの中国語（漢字）、左に意訳と直訳の英文、右に北京音と広東音の音注が附されている14）。また、漢字は木版で英字は金属活字であるが、このように漢字と英文を同じ紙面に並べて印刷（二度刷り）するのは当時としては初めての試みであったという15）。鈴木広光氏のご教示16）によれば、「中国語概説部分の漢字活字（欧文と混植）は、モリソンの字典などに使われているおなじみの彫刻活字」であるという。

この『意拾喩言』の大きな特徴として、まず、時間や場所の設定、話の内容、モラルを「極めて中国的」に変えていることがあげられる。

たとえば、「昔々あるところに」といったいわば「まるくら」の言葉には、次のような中国式の人名や地名、書名が用いられている。（数字は寓話の番号）

盤古初………………………………(1)
山海経載……………………(3)
大禹時……………………(6)
神農間……………………(7)
羅浮山下鬱若幽樓………(12)
禹疏九河之時……………(16)
虞舜間……………………(24)
峨嵋山下……………………(28)
昔大禹治水，泗淮騰濤…(34)
齊人有一妻一妾…………(59)

16は有名な「鬼と亀」の話であるが、「禹が治水の時に，動物達は皆とりあげず避難した。その時に、鬼と亀が一緒にになった。」と話が始まっていくわけである。

また、「俗云」「謡云」とかで始まるモラルの部分も多くは中国の故事成語の類を利用している。

欲加之罪，不患無辞(1)……左傳
漁人得利(3)…………………戠國策
駿兵必敗(46)…………………漢書
無君子莫治野人，無野人莫養君子(46)……孟子

次の例のように，はっきりと「論語に云ふ」とか「孟子に云ふ」と示してい
る場合もある。

論語云，小不忍則亂大謀，其信然矣。(24)
孟子云，矢人惟恐不傷，函人惟恐傷人，又何怪乎。(29)

このほか，「愚夫智愛（原語は「雌猫とアフロディーテ」）」(64)では，「月の神アフロディーテ」は「嫦娥」として登場するし，「車夫求佛」(66)では「力持ちヘラクレス」は「阿彌陀仏」と翻訳されている。「蛤求北帝」(68)の「ジュピタ
ー」は「北帝」(71)となる。

まさに，トームによってイソップは「中国の衣装をその身に縫って」(18)中国に現れたのである。
『意拾喩言』のもう一つの大きな特徴はその文体にある。

トームは、英文序の中で、このスタイルを「the simple style」と呼び、「文字之末」である「雑録」、あるいは「Lowest and easiest style」に分類されるとした。そして、このスタイルをマスターすれば学習者は全く困難なしに、様々な「小説」類や現在の大衆小説が理解できると考えた。

このトームの採用した文体は、後の漢訳聖書の三種の文体（「文理」「淺文理」「国語」）のうちの「淺文理」、あるいは Varo (1703) の言う「第 2 モード」ともに、ほぼ相当するものと考えてよいと思われる。基本的には「文言」であるが、「白話」に限りなく近い「文言」すなわち「文言白話混交体」である。

「白話」的要素として考えられる語彙や語法について見ていくと、先ず典型的な白話表現として、次のような「進行、持続の表現」や「完了の表現」が用いられている。

正在忙亂

接着外套忙奨而來

請了，請了

買了那幾位

紅漲了臉

また、差得遠といった慣用的な「様態補語」の使用、捲去(8)、伐去(8)、咬去(8)、走出(8)のような「方向補語」や継住(6)、競不了(6)のような「結果補語」「可能補語」が多用されていることも白話的と言えよう。

這や他、你という白話的な代名詞も以下のように使用されている。

這還了得

這小子

看他如何

你我同事

你我不不同道

白話的な副詞としては以下のものがあげられる。
必得大王親往
永得保全
只得脱下外衣
休得
幾乎淹死
將近成功

このほか、介詞や極めて白話的な語彙もいくつか以下に示しておく。

＜介詞＞
狐狸已往東方去矣
狐始從草堆走出
將手撫鬚
其子將撲耳咬去
將羊按律治罪
將所耕之田盡行掘過找尋
幾將村鼠攫去
幾將行人外套吹落
向母羊身上爪去
在京鄉過活
小鼠在旁玩跳

＜白話的語彙＞
還了得，將就，出差，方便，第得，養得，下種于，放心，
衆小官，高興，得罪，玩意，玩耍，摸弄，不值甚麼了

確かに欧米人の中国語学習用テキストとして編集された『意拾啓言』である
が、このように、内容を中国風にアレンジし、また非常に平易な白話に近い文
体を採用したことにより、中国人、中国社会にも受け入れられたと言うこと
ができるだろう。また、そのことが、宣教師達の中国伝教の方針と符合するこ
とで、彼らに評価され、彼らによって様々な形で引用、紹介、出版され広が
っていったのである。
このトームのイソップ翻訳の方法、態度、つまりその「翻訳観」は実は、モリソンの「翻訳観」を受け継いだものだと考えることができる。単なる「語彙の置き換え」でなく、あくまでも「中国人の思考」を念頭に置いた、いわば「相手方の文明に身を置く」（柳父1986）という「意識的な中国文化への自己同化」立場である。トームは本書の中国語「叙」の中で「如先儒馬融所作華英字典、固屬至要之書、然而僅通字義而已」と述べているが、これはモリソンの字典が無益であると批判する言葉ではなく、むしろモリソンの自己評価、「翻訳観」を代弁したものと言なければならないだろう。なぜなら、モリソン自身が自分の字典に対してこう述べているからである。

読者は、翻訳に際して使える正確なことばを、この字典に期待してはならない。ここで提供できるのは、しかるべき文句を取出すのがかりとなるようなことばの意味なのである。また、中国語の詩的な意味が正確にここで得られると期待してはならない。ことばの移り変わる意味のすべてとか、よく使われる漢文古典の比喻の意味などもここに求めてはならない。そういうものは、これまでヨーロッパ人が中国語を学んできたのよりもずっと多く、さまざまな才能の人たちの努力にまたなければならないのだ。（柳父1986，113p）

この字典を作った著者の目的は、西洋人に中国語を伝えることであった。ところで、いったい文から離れた単語の定義だけで、ことばの意味を伝えることができるのは何か。……辞書にあるのは、文から切離された単語の定義だけなのである。（同上書，117p）

ここでモリソンが述べていることは重要である。「辞書」の中ににあるのは言葉ではなく、柳父章氏の言葉を援用すれば、「翻訳における「正確なequality」はそもそも期待できないものであるという基本的な態度が表明されている。

「言語」とは「人の表現」の一つであり、「対象—認識—表現」という過程的な構造を持っている。その成立の基盤として「話者（表現者）」すなわち「人間」の存在は不可欠である。このような言語観に立った時、ある言語の「語

14
イソップ東遊〜ロバート・トームと『意拾喩言』(内田)

「意拾喩言」は、その言語を使用する民族、種族の、ある対象に対しての共通の「認識の集合」と考えられる。言い換えれば、言語はその使用する民族や種族の「歴史」「思想」といった「文化」を反映したものである。「文から切離された単語の定義だけでなく、ことばの意味を伝えることはできない」「辞書に言語はない」というのは、まさにそのような言語観に基づく「文化移入」「文化受容」の態度であると言うことができる。従って、「翻訳」に求められるものも、いわゆる「語彙の equality」ではなく、目に見えない「認識（あるいは価値）の equality」ということになり、ここで「言語の翻訳」とは、「文化的翻訳」ということになるわけである。このような、モリソンの翻訳観をトームはイソップの翻訳において具現化させてみせたのであり、トームはまさに「モリソン翻訳観の正統な後継者」と言えることができるのである。

4. 『意拾喩言』

ところで、『意拾喩言』の英文版には次のように書かれてある。

When first published in Canton 1837—38 their reception by the Chinese was extremely flattering.

（最初に1837—38で公にされた時、中国人から極めて大きな歓迎をうけた）

また、『東西洋考毎月統記説』の戊戌五年（1838）9月の「新聞」欄「廣州府」の記事の2つめに次のような記載があり、その後に、4つの語話が紹介されている25)。

省城某人氏文風甚盛、爲翰墨詩書之名儒，將希臘國古賢人之比喻、翻譯譯華言，已撰二巻。正撰者誠為意拾喩、周貞定王年間興也。聰明英敏過人、風流靈巧、名聲揚及四海。異王風聞、召之常侍左右、快論敏言國政人物、如此甚遠之恩。只恐直言觸貳、故擇比喻、致力勸世棄愚愚智成也。因讀者未看其喻余取最要者而言之。

4つの語話は、『意拾喩言』で言えば No.1 の「豺烹羊」、No.3 の「醜熊爭食」、No.12 の「狼受犬騙」、No.22 の「麶貓狗同居」であるが、『意拾喩言』
とは若干の語句の異同が見られる（ただし、これから述べる『意拾秘傳』とはほぼ同じ）。


つまり、『意拾嚙言』が出版される以前に、その初版とも言うべき『意拾秘』とかいうものがすでに存在していたということになる。

ダグラス『大英博物館所蔵漢籍目録』（坂出祥伸解説、科学書院、1987）には、イソップの項と、ロバート・トームの項に以下に示すように『意拾秘傳』なる書名が記されていると、

Aesop, THE PHRYGIAN.
意拾秘傳 E-shih-pe chuen. “Aesop’s Fables.”
Translated into Chinese by Lo-pih Tan. 4 keuen. 1838. 8° (1p)
羅伯聰 Lo-pih Tan [i.e. Robert Thom]
See Aesop, THE PHRYGIAN. 意拾秘傳 E shihpe chuen.
“Aesop’s Fables.” Translated into Chinese by Lo-pih Tan, &c. (143p)

ここで『意拾秘傳』の標音が「E-shih-pe chuen」あるいは「E shihpe chuen」となっていることに注意が必要かもしれない。実は筆者もこれまで『意拾秘傳』を『意拾／秘傳』と誤んでいたのであるが、これは『意拾秘／傳』と誤むべきだったのだ。「秘」は広東音つまり、モリソンの標音では「pe」であり、「意拾秘」は「Aesop」の音訳なのである。いずれにせよ、この『意拾秘傳』こそが『東西洋考每月統記傳』で言うところの『意拾秘』あるいは、トームが序で述べ、『Chinese Repository』で紹介された「Aesop’s fables in Chinese』、つまり『意拾嚙言』の初版本である可能性が非常に高い。ただ、これまでこの『意拾秘傳』については管見の及ぶ範囲では未だ言及されていないようである。

今回、大英図書館よりマイクロフィルムを入手できたので、これについて以下述べておきたい。
4-1. 『意拾啓言』との比較

表紙に『意拾秘傅』とあり、全4巻、12cm×21cm、縦書き線装本。
各巻の構成は以下の通りである。
巻一（ただし「巻一」という表記はない）：英文目次欠、本文4葉、9行22字
巻二（以下は表紙に「巻～」の表記あり）：英文目次、本文9葉、9行22字
最後のページに「道光戊戌蒲月吉旦　鶯吟羅伯瞻述」とあり。
巻三：英文目次、本文12葉（最初の1葉欠）9行20字、最後に「鶯吟羅伯瞻」とあり。
巻四：英文目次、本文11葉、9行20字
なお、巻一・二と巻三・四では活字が異なる。
巻二と巻三に見える「鶯吟羅伯瞻」であるが、「羅伯瞻」はトームの中国名でよく知られている。問題は「鶯吟」である。本来の意味としては「鶯のこえ」（たとえば李白の詩に「魚躍青池滿、鶯吟綠樹低」とある）ということであるが、それでは通じない。全くの推測に過ぎないが、ここではトームが文人を気取って「イギリス人（英人）」の音訳として用いたと考えておきたい。
また、巻四の英文目次の次に、手書きによる「羅伯瞻自叙」と、『意拾秘傅小引』がそれぞれ1ページ付けられている。自叙において、『意拾啓言』の「華英字典」が「漢英字典」に、また、『意拾啓言』では「知名不具」と名前を伏せているのに対し、『意拾秘傅』では、『羅伯瞻自叙』と本名を記している以外、語句の異同は認められない。
収められている寓話は全部で77話で、それぞれ『意拾啓言』とは以下のように対応している。
巻一・・・10話（『意拾啓言』の1-10に対応）
巻二・・・21話（12-31）
巻三・・・24話（33-56）
巻四・・・25話（72-79、ただし58はなし）
すなわち『意拾喩言』には、11の「囲蚊比類」、32の「睘鹿失計」、58の「鳥悟靠魚」、80の「老嫗皆亡」、81の「直神見像」が加わったことになる。
また中文タイトルと英文タイトルの違いも若干認められる。
なお、各話の語句の異同は後日、校勘表の形で提示することにする。
結局、1840年出版の『意拾喩言』は、『意拾秘諫』の改訂増補版であることが確かめられたわけであるが、この『意拾秘諫』の発行年、発行場所については、なお未確定な部分が残されている。
トーム自身が「塩東で1837－1838年に出版した」と述べているから間違いがないのだろうが、気になるのは『東西洋考每月統記傳』と『Chinese Repository』の記述である。
『東西洋考每月統記傳』では、出版場所については明記されてはいないが、広州州府の記事であるから、出版場所は広州と考えるのが自然である。一方『Chinese Repository』では、その情報源が Macao となっている。また、『東西洋考每月統記傳』では2巻となっているのに対し、『Chinese Repository』では3巻と紹介されており、実際に大英図書館に所蔵されているのは4巻である。

The fables before us, now for the first time in a Chinese costume, have been selected from Sir Roger L'Estrange's collection, and are contained in three little octavo tracs, the first in seven, the second in seventeen, and the third in twenty-three pages.

ここでは、中国の衣裳を纏って現れたイソップの原本は、Roger L'Estrange のものであること、そして、中国語版は3巻の小さな8折り判であること、第1巻が7ページ、第2巻が17ページ、第3巻が23ページということが述べられている。
判型については、大英図書館蔵本と一致する。ページ数も、本文のみ（英文目次と署名のみのページや白紙のページは除外）の計算と考えると、第3巻だ
They have made their appearance, one after another, at intervals of about a month, are well liked by the Chinese.

つまり、それぞれ大体1ヶ月の間隔で順々に発行されたというのである。

この記事が掲載されたのは1838年10月であるが、『Chinese Repository』で紹介される本は、紹介する号と発行年月はそれほど開きがないのが普通である。また『東洋考每月統記傳』の記事は9月であり、両者が同じものを指すとすれば、9月までに2巻が発行されたということになり、第1巻から第3巻までの発行時期は、8月から10月。少し早めても7月から9月であって、第4巻は10月以降に発行されたと考えられる。いずれにせよ、1837年まで下げるのにはどうしても無理が生ずるのである。考えられる可能性としては、ただ一つ、『Chinese Repository』で紹介された本と、『東洋考每月統記傳』で紹介した本や、大英図書館蔵本とは別の版本ということである。訳者自身が1837年と言う以上は、その可能性が強いかもしれない。大英図書館蔵本では、トームの実名（中国名）が記されているが、『Chinese Repository』では更に以下のようないい「Munmooy seenshang」という『意拾喻言』に見える名前が登場してい るからである。

Munmooy seenshang, 'the translator', certainly deserves much credit for the very easy style into which he has moulded the quaint English of Sir Roger.

つまり、広東版は1837年から1838年の9月までに2巻が発行されて、9月以降に更に残りの2巻が出版された。そしてそれは恐らくは注23）にあるように、「在華實用知識傳播會」の出版物として発行された。これとは別に、マカオでも「Munmooy seenshang」の名で『意拾喻言』にほぼ近い形のものが出版
5. 「意拾」から「伊婆菩」へ—日本に伝わった『意拾喻言』

さて、『意拾喻言』は日本へも伝わっている。ただし、『意拾喻言』ではなく、『伊婆菩喻言』とその名を変えてである。

たとえば新村1973では次のようにある。

ともかくも此の漢訳本『意拾喻言』の系統本は、幕末嘉永安政年間に至って、日本に伝来した。駿河田中藩の増田貞万の号を跡陽といつた人の写した『伊婆菩喻言』と題する写本を岡崎桂一郎博士の蔵本によって大正初年に見たことがあるが、それには長州の矢戸琉（山県半蔵、号世衡）が安政五年丙辰陽月に跋を加えしたものと、又安政四年十一月二十日吉田松陰が再跋を施したものを書き加へてある。私はそれらの跋文のない普通の写本を蔵してある。いずれにしても『意拾喻言』から出た同本である。矢戸の跋によると、『喻言七十三条。蓋し英人の訳する所にして上海施医院の活字刷板に係る、其の地名を挙げ時世を説くや皆之を支那に仮し、是れ訳者之を苦心する所なり。』の書末に清船の倉貯を経ず、某氏の嘗て之を俄館中に獲たる所と云ふ。……』(416p)

ここで触れられている新村蔵本写本『伊婆菩喻言』は、現在、新村出記念財団重山文庫に収められているが、それにも、新村博士の次のような書き込みが見られる。

『上海施医院活字版ノ『伊婆菩喻言』安政ノ初年頃仏勅ヲ得テ矢戸琉、安政三年（丙辰）ノヲ写ス、翌年（丁巳）吉田松陰松可村塾ニ於テ門下ノ岡部生ヲシテ、矢戸ノヲ跋ス。なお、重山文庫には、『伊婆菩喻言叙』（写本2葉）が収められていて、それは、新村博士が大正初年に見たという、矢戸と松陰の跋のある増田貞写本である。

新村1973では、この漢訳イソップの日本伝来を、嘉永六年即ち1853年頃と結
イソップ東語ロバート・トームと『意拾喩言』（内田）

論づけているが、ここで問題になるのは、何故「意拾」でなくて「伊婆菩」であるかである。筆者は拙稿1994で、関西大学増田文庫蔵『漢訳批評伊婆菩物語——一名伊婆菩喩言』（1898）について発表した時に次のように述べておいた。

つまり「意拾喩言」の改訂版と言うことができます。メドハーストなどの手が入った可能性もあるかも知れません。また、何よりも『意拾』と『伊婆菩』あるいは『伊婆菩』では表記が異なっております。
後者は「入声」のないところの表記のように思われます。それは「広東」以外の場所であるように思われます。（18p）

これを解く鍵は『遐邇貫珍』にある。

広東で出版された『意拾喩言』は、その後、香港最初の華字月刊紙『遐邇貫珍』に連載される。『遐邇貫珍』の創刊号（1853年8月）に「喩言─則」の欄が設けられ、そこに以下のように「伊婆菩喩言」という言葉が登場するのである。

伊婆菩喩言

伊婆菩者、二千五百年前、記労士國一奴僕也、背倦而貌醜惟具天資、國人懼其聰敏、為人贈身、舉為大臣、故設此譬喻以治其國、國人近日理性、尊之為聖、後奉命至他國、他國之人知其才、推尊危崖而死、其書傳于后世、如英吉利、俄羅斯佛蘭西、呂宋、西洋諸國。莫不譯以國語、用以啓蒙、要其易明而易記也。此後各號隨時附記─則。

これは最後の「此後各號隨時附記─則」を除いて、『意拾喩言』の「意拾喩言小引」に該当する部分であるが、『意拾喩言』との大きな違いは、「意拾」が「伊婆菩」に、また「天聰」が「天資」に置き換えられていることである。一方、『漢訳批評伊婆菩物語——一名伊婆菩喩言』（もちろん重田文庫の「伊婆菩喩言叢」と、『伊婆菩喩言』でも同じ）でもこの文が最初に掲げられるが、『遐邇貫珍』と同じ様な書き換えがなされている。明らかに脱字と思われる1カ所以外に、ギリシャを「希臘」と表記している点が『遐邇貫珍』と異なっているが、「イソップ」を共に「伊婆菩」とすることは両者の関係の深さを疑わせるものである。事実、その後、『遐邇貫珍』に連載されたものと、『漢訳批評伊婆菩物語——一名伊婆菩喩言』を共に表記されている点を疑わせるものである。
普物語—名伊婆善喩言—に収められたものを見比べていくと，『意拾喩言』との語句の異同が多くは一致している。つまり，日本に伝わった『伊婆善喩言』は，この『遡遡貫珍』系続のものであるということである。ただ，『遡遡貫珍』第3号（1853）に掲載された「ライオンと虫と蜘蛛」のように，『意拾喩言』『伊婆善喩言』のどちらにも収められていないものもある。

『遡遡貫珍』は周知の通り，香港『英華書院』から刊行されたものであるが，その初刊の編集者は上海に滞在していたメドハーストである。また，実戦の賛に見える「上海施医院の活字刷版」というのは，拙稿1996で述べたように，恐らく「上海施医院＝山東路医院＝仁濟医院」の隣にあった「墨海書館」印刷ということである。「墨海書館」とはまさにメドハーストの手にかかるものである。『遡遡貫珍』＝『墨海書館』＝『上海』といずれも，メドハーストを中心に展開している。そして，ここで「Aesop」の音訳語の変更や『意拾喩言』の語句の若干の修正がなされた可能性は十分考えられる。「意拾」は広東語では「isep」であるが，上海語には広東話のような完全な「入声」はなくっている。「Aesop」の「p」を表すのに「善」という漢字を付け加えて「伊婆善」（isopu）としたというのが筆者の推測である。すなわち，日本に伝わった『伊婆善喩言』は『意拾喩言』のメドハーストによる改訂版であり，それは最初『遡遡貫珍』に連載の形をとって，後に墨海書館から1冊の本として安政3年（1856）前後に出版されたものと考えられる。また，この『伊婆善喩言』は，これも拙稿1996で触れのように，高杉晋作らの文久二年（1862）上海行の際の購入書にも含まれている。

なお，増田文庫蔵『汉譯批評伊蘢善物語—名伊婆善喩言』（前田林外編纂，小野篤山訓点）は明治31年（1898）の出版であるが，これには同治七年（1868）春三月の叙が付いている。『意拾喩言』の叙とはほとんど同じであるが，『意拾喩言』では「漢文＝中国語」を学ぶ人のためとしたところを，本書では「英文」を学ぶ人のためとしている点が異なっている。しかし，増田写本や栗本錦雲写本の見える限り『意拾喩言』と同じ「漢文」を学ぶ人のためとなっており，これは前掲1989で言うように，トームの「崇味先生」に引かれた編纂者の
個人的意図によるものと考えられる。併せて『伊婆善喩言』をサブタイトルにして、「伊蘇普」を冠せたのは、日本でのイソップの名称の定着度によるものであろう。このほか、本書ではモラルの部分を「評曰」で始めている点も特徴である。

ところで、日本ではもう一つ、『意拾喩言』系統本が存在する。明治9年（1876）に出版された『漢譯伊蘇普譚』（阿部弘国訓点、大観翁演序）がそれであるが、これはは扉に「英華書院原刻」とある。「英華書院」は先にも述べた『遐邇貫珍』を発行したところであり、これもその系統と考えられる。いわゆる『伊婆善喩言』の香港版である。上海版つまり黒海書館版と同じく寓言73話を収めているが、ただ、その配列が異なっている。つまり香港版と上海版とは別の系統という可能性があるのである。

『伊婆善喩言』が同治十三年（1874）時点に香港で出版されていたことは確かである。たとえば王錫によって発行された『循環日報』の同治十三年六月初五日（1874年7月18日）の「中華印務局内文裕堂」と「幼童初學各樣書籍發售」という広告には、『談天』『重學淺説』『西醫略論』『格物入門』といった科学書や『智環啓蒙』『英語集全』『華英通語』といった学習書と並んで『伊婆善喩言』の名が見えている。

『循環日報』はその印刷設備を英華書院から購入したが、その際にそれまで英華書院で発行していた書籍の版型を譲り受けたと思われる（恐らくはその中に『伊婆善喩言』も含まれていたはずである）。それらを「文裕堂」の名で出版したというわけではない。

オーストラリア国立大学図書館蔵の『伊婆善喩言』はこの「文裕堂」版である。「光緒癸卯年（光緒二十九年＝1903年＝筆者）夏四次校讐、香港文裕堂活版」というのがそれであるが、阿部本と比較してみると、「叙」と「小引」が阿部本にはないのを除き（阿部本では大観翁演による「伊蘇普譚譚」と阿部による「伊蘇普小傳」が付く）、両者はその配列も寓話の数も全く同じである。

戈1992では次のように言う。

英華書院（Anglo-Chinese College）於1843年由馬拉西亞的馬六甲遷至
香港、院長は英国漢学家人雅各 (James Legge)。書院新刊刊印了《意拾喻言》，改名為《伊説普喻言》。接着上海的一家教會創辦的醫院施醫院也刊印了本書，從其中選了73則寓言，並附有原《敘》及《小引》。出版年代不詳，估計當在1840年至1850年之間。(199p)

これは一つの推論であるが，Legge が「伊説普」改名したとする根拠が示されていないこと，また73話を選んだのは上海版であるというが，先に述べたように，香港版（つまり英華書院版）でも恐らくは初めから73話であったことなどから，にわかには背けないところである。また『遐邇貫珍』に全く触れられていないことも気になる点である。もちろん，Legge も Medhurst と同じ程度に『英華書院』『遐邇貫珍』との関係が深い人物であるから，戈の説には充分の可能性があるわけであるが，今後の調査に待ちたいと思う。

『意拾喻言』以降，中国では欧米人や，中国人によるかを問わず，多くの中国語訳イソップが登場してくる。ただ多くはいずれも『意拾喻言』をその底本としており，『意拾喻言』の影響力の強さを物語っている。それらのことに関してはいずれ稿を改めて論ずることにして，ここでは最後に，筆者が見ることのできた欧米人の手になるいくつかの中国語訳イソップを以下に示しておく。なお，元になった L’Estrange 版イソップとの具体的な対照，「観味先生」は存在したか，あるいは『意拾喻言』は「禁書」に処せられたか否かなど，今回紙幅の関係で述べられなかった問題も残されているが，これもまた後日更新することにしたい。

(1) James Summers『A handbook of the Chinese language』（Oxford，1853）
……Part II. Chinese chrestomathy にイソップが8則収められる。表音と漢字，それに英語の解釈付き。

(2) 上海清心書院『小兒月報（Child’s Paper）』第2部（New Series, Second Volume: Shanghai，1877—1878）……毎号にイソップが掲載されている。
「鬼と兎」が「蛇と兎」に変えられている話もある。なお，『小兒月報（Child’s Paper）』は1875年にアメリカ人宣教師 J. M. W. Farnham によって創刊された児童向けの雑誌であるが，この初期のものが未見である。
イソップ東遊—ロバート・トームと『義拾喩言』(内田)

(3) St. Francis Xavier's School (Shanghai) "A method of learning to read, write and speak English for the use of Chinese pupils Part II 英文捷訳" (ZI-KA-WEI, Printed at the catholic mission press, Orphan Asylum of Tou-Sè-wè. 1883) ……中国人のための英語学習用テキスト(40)であるが、この第31章から第39章まで(147p)の各課に「読本」の教科としてイソップが1ないし2話ずつ、合計16話収められている。ページの左半分が英文、右半分が中国語という、英漢対照になっている。

(4) 上海商學會『孩訓喩説 (A collection of useful fables)』(上海商務印書館, 1900) ……中西書院（Anglo-Chinese College, Shanghai）の Rev. George R. Loehr によるものだが、102話の寓話のうちの多くはイソップである。

(1999. 7. 10脱稿)

【付記】

本稿は平成10年度関西大学在外研究の成果の一部である。期間中、ハーバード大学を中心として欧米の大学図書館等で貴重な資料を見ることができた。このような機会を与えて頂いたことに心から感謝する。また、今回の執筆に際しては、マイクロ等の資料請求で関西大学図書館のレファレンス・サービス課、さらに文学部の松浦章教授には特に世話になった。併せて記して感謝の意を表しておきたい。なお、印刷の関係で引用した簡体字は全て繁体字（旧字体）に変更してある。

【主要参考文献】

Hunt, Freeman『The Marchants' magazine and commercial review』第16巻第4号, New York, 1847. 4.
Bazin, Par M.『Chine moderne ou description historique』 Paris, Firman didot frères, Éditeurs. 1853 (TL'univers, Histoire et description de tous les peuples.
Chine moderne, Part 1=Pauthier, Part II=Bazin, Par. M).
Inspectorate General of Customs 「The Catalogue of Publications of Protestant Missionaries in China」 Shanghai, 1876.
『支那叢報』第 8 巻解説，丸善株式会社，1942。
杉浦丘園『英語用語録』清文堂，1922。
鹿田文一郎『四庫薫誘』於『書史』第 1 冊，1927. 2. 20。
鈴木秀太郎『四庫薫誘』補遺，於『書史』第 2 冊，1927. 5. 20。
新村出『伊曽保物語の演説』『明星』のち『新村出全集』第七巻に収録，1973。
増田涉『西学東渡と中国事情』岩波書店，1979。
柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房，1986。
ロバート・K・ダグラス編 坂出祥伸解説『大英博物館所蔵漢籍目録』科学書院，1987。
——『大英博物館所蔵漢籍目録・補遺篇』科学書院，1987。
卓南生『中国近代新聞史実録 1815 — 1874』ベリカん社，1990。
前坊洋『イソップ，東アジアへ』『近代日本研究 6』慶應義塾福澤研究センター，1989。
古屋昭司『17世紀ドミニコ会士ヴァロと『言語文典』』『中国文学研究』22，1996。
——『現代知識人の言語生活—一の歴史を中心に—』『現代中国語学への視座—新シノロジー・言語編』東京書店，1998。
内田慶市『イソップ東渡—一の教訓の文化の翻訳』の方法をめぐって』『国文』第 33 号，1994。
——『「イソップの東渡」補遺—一上海旅医院，その他』『関西大学中国文学会紀要』第 17 号，1996。
——『清国英語事始』『関西大学中国文学会紀要』第 18 号，1997。
周作人『自己的圏地』北新書局，1927。
『中国報学史』商務印書館，1931 初版，1932 再版。
裴化行（Bernard, R. P. Henri）著，王昌社訳『利瑪竇可譜和當代中國社會』上海徐家
イソップ東洋一ロバート・トームと『意拾説言』（内田）

『決定山詞新解字』明治3年。
裴化行（Bernard, R. P. Henri）著，管震湖訳『利瑪竇神父傳』商务印書館，1998。
方美賢『香港早期教育發展史』中國學社，1975。
中國社會科学院近代史研究所翻譯室『清代來華外國人名錄典』中國社會科學出版社，1984。
戈寶權『談利瑪竇著作中翻譯介紹的伊索寓言—明代中譯伊索寓言史話之一』『中國比較文學』第1期，浙江文藝出版社，1984.10。
——「羅伯階譯譯的『意拾説言』及其他一清代中譯伊索寓言史話」『中國比較文學』総第41期，上海外國教育出版社，1992.6。
方漢奇『中國近代報刊史』山西教育出版社，1991。
雅洪托夫著，唐作藩等選編『漢語史論集』北京大學出版社，1986。
前長聲『傳教士與近代中國』上海人民出版社，1991。
熊月之『西學東漸與晚清社會』上海人民出版社，1994。
張秀民，韓琦『中國活字印刷史』中國書籍出版社，1998。

註
1）日本のイソップ会の場合も、日本語教材として彼らが最初に訳したのは「ドリーナ・キリンタン」と「イソップ」であった。ローマ字による『ESOPNO FABVLAS』いわゆる「文藻懸譯伊索保物語」は1583年に天草で出版された。「ドリーナ・キリンタン」もほぼ同時期（1591）である。一方、中国語訳ドリーナ『P'Catecismo de la Doctrina cristiana』も1593年にドミニコ会のJuan Cobo（高木義）によってマニラで出版されたという事実がある。Coboにはドリーナの他に、『明心宝鑑』（1591）『無極天主正教真僞實錄』（1593）などの著作があるが、日本の状況と考え合わせた場合、リッチやトリガー以前に、イソップの中国語訳もCoboなどによって当時出版されていた可能性も否定できない。今後の課題である。

2）これらの『意拾説言』以前の明代以上の中製イソップについては別に論考を準備している。

3）『The Canton Press』は英国商人により、1835年9月12日に広東で創刊された新聞で、毎週土曜日に発行された。1839年6月1日号（No. 195）までは広東で出版されていたが、アヘン戦争前夜の英国と中国の関係悪化化に伴い、澳門に移され、1839年7月6日号（No.196）からは澳門で発行された。その後、1844年3月30日号（No.443）をもって停刊。

Britton1933によれば、龍源は『The Canton Register』や『The Canton Press』という英文タイトルを中国語に訳す際にそれぞれ『澳門雜誌』『澳門新聞誌』に置き換えたが、その理由は当時、林則徐や龍源は外国人がそのようなものを広東で出版していたという事実を公にするのは不適当と考えたからだという。（同書33p）
ところでお読の最初の著作である『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』（1839）も『意拾喩言』も同じく「Printed at the Canton Press Office」となっている。しかし，Bazin 1853 によれば次のようにある。


1840. Aesop's fables, written in Chinese by the learned Mun-mooy, and compiled in their present form, with a free and literal translation, by his pupil Sloth (Rob. Thom.). Macao, in-fol.

このように，一方は Canton で一方は Macao と記されているのである。

この点について，かつて鈴木憲太郎氏が以下のように触れられたことがある。

玉穂（亀田文一郎1927「スロース譯述「意拾喩言」について」一筆者）中に示された「意拾喩言」の標題に依りて該書が廣東プレス・ヲフ井スにて印刷せられたことを見取るが，Chine Moderne（1853年出版）第二巻バザン，M. Basin（Bazinの誤りか一筆者）執筆の部「書史」中の1840年の項 [P. 670] に，トムの「意拾喩言」が Macao（澳門）にて刊行せられたやうに記しけるが，事實該港にて刊行せられたものなるか。御示教を得ば幸とする所である。

（『意拾喩言』補遺』『書史第2冊』昭和2年5月20日，16p）

Bazin のこの記述はおそらくはその刊行地あるいは「Canton Press Office」の置かれた場所を述べていると考えられる。『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』が出版された頃は「Canton Press Office」はまだ広東にあり，「意拾喩言」の項にはすでに上記のように澳門に移っていたわけではない。あるいは「序」が書かれた場所を言っているとも言える。事実，前後の序は「Canton, 25th December 1838」であり，後者は「Macao, 15th May 1840」となっている。

4) 『Chinese Repository』（Vol. IX 1840）の Bridgman の記述によれば「an odd misnomer」ということになる。

5) 『意拾喩言』の扉の次ページには次のような，献辞が掲げられている。

To those generous patrons by whose bounty the entire express of his Chinese education was defrayed, William Jardine Esquire, James Matheson Esquire, Henry Wright Esquire, of Canton, the following little work being the first-fruit of a long course of study by their very numble and often-obliged servant.

これは，トムはこの会社から，時折彼らのために通訳をする見返りとして，それによって彼の中国語学習の経費が全て貰われるほどの多くの報奨金を得ており，それに対する感謝の意を表したものである。『Chinese Repository』（Vol. IX, 1840）参照。

また同じような献辞が『Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han』（1839）にも見られる。
6) この初代領事就任の年月については、問題がないわけではない。『近代来華外国人名辞典』（1981）では1843年10月があり、『清季中外使領年表』（中華書局、1985）では道光23年10月＝1843年12月である。

7) 前稿で和刻本『漢英通用雑誌』についてその存在に疑問を抱き続けていたが、『和闇及外國關係圖書並物品目錄』（1921）の「和闇及外國關係圖書追加目錄」に以下のようにある。

漢英通用雑誌上巻 英・羅伯駿著 萬延元年九月 青井堂
この目録は杉浦丘園（利順）所蔵の図書（約五万余）のうち、オランダおよび外国関係のものと関係のものが大正十年十月に明治京都図書館にて展示した時ものであり（緒言）従って、実際にこの本は存在していることになる。

8) 張秀民、翁贄1998によれば、「分合法字」の初期のものとして同じ「寧波華花聖經書房」から出た『耶穌教要理問答』（1849）があげられているが、トームのはそれより3年前である。

9) 本書の序文において Bridgman は次のように述べている。

The reading of Chinese books, —such as tracts, essay, &c.—composed by foreigners, is a very questionable course. When the style is purely Chinese, all the phrase having been selected or formed by native masters, as in the case of Esop's Fables, it cannot be objected to.

ここは中国語のテキストの信頼性について述べているのだが、『意拾嘩言』のように母国語者によって作られたものならばよいというわけである。つまり、『意拾嘩言』はトーム一人で作られたものではなく、「藤未先生」の実在を暗示している。

10) たとえば、『Modern English Biography』（1965）では次のようにある。

THOM, David. b. Glasgow about 1795; minister of the Scotch ch. Rodney st. Liverpool and then of Bold st. chapel, Liverpool; author of The assurance of faith or Calvinism identified with Universalism, 2 vols. 1828; Dialogues on universal salvation and topics connected therewith 1838, 3 ed. 1855; The three grand exhibitions of man's enmity to God 1845; The scripture doctrine of the atonement 1868; and other books. (923p)

11) David Thom の文書は次のように始まっている。

The Rev. David Thom begs leave to present to the Trustees of the British Museum, a copy of a posthumous work of his late brother, Robert Thom Esqr, Consul at Ningpo, China, entitled "The Chinese Speaker."

12) トームのこのような卓越した言語学者としての資格が、当時も高く評価、尊敬されていたことは、たとえば、中国語の文体等について優れた解釈を示した Meadows がその書でトームに次のような献辞を捧げていることからも窺える。

To Robert Thom, Esq., her Britannic Majesty's consul at Ning-po, these notes
are dedicated, as a testimonial of respect for his high character and talents, by
his obliged and grateful friend.
(Desultory notes on the government and people of China., 1847)

13) この「particle」というのは、トームによれば、「之、乎、者、也、矣、焉、哉、七
字能分者秀才也」で代表的に示されるいわゆる「虚字」の類である。また「複数」を
表す「輩（輩輩）」や「曹（軍曹）」「等（伊等）」などもこの類に入れられる。

14) 「References and Explanations」に次のように説明されている。
The English in the Roman character, is a free translation from the accompa-
nying Chinese.
The English in Italics, is a literal and verbatim translation for one Chinese
character, on the Hamiltonian principle.
The Chinese sounds in the Roman character, give the Mandarin pronunciation
of Nanking City—as fixed by the late Dr. Morrisons in his excellent Syllabic
Dictionary.
The Chinese sounds in Italics, give the Vulgar pronunciation of Canton City,
chiefly founded on the system of spelling adapted by Dr. Morrison, but altered so
as to resemble as much as possible his mode of spelling the Mandarin.

15) 英文の序で次のように述べている。
This is the first time, we believe, that any work has been printed on Chinese
wooden blocks, and European metal types—placed side by side. The experi-
ment having succeeded—numerous works will now most probably be printed in
the same way.

16) 1999年6月1日付けメール。

17) この「北帝」について、前坊1989では「そもそも「北帝」ということばは漢語辞書
のうちに発見されぬ」(59p) と述べておられる。ただ、これは恐らく出典がある。
『意拾婚礼』よりは後に出版されたがメドハーストの『An inquiry into the proper
mode of rendering the word god in translating the sacred scripture into the
Chinese language』(Shanghae, 1848) に『廣博物志』を引いて次のように言う。
In the 26th sect, the ancient emperor 炎帝 Yen-te is said to be the present 北帝
Pih Tc of the northern region and superintendent of all the Kwei Shins
throughout the world. (57p)
『廣博物志』の該当の個所には次のようにある。
炎帝，甲者古之炎帝也今為北太帝君天下鬼神之主（巻14—26）
つまり、「北帝（北帝）」は「北方の帝」であるばかりでなく、全ての「鬼神」を
統轄するものとして存在するというわけである。また「北方の帝」としての「北帝」
は『戦国策』などにも登場するし、「黒帝」の意味としても古くから使われている。

30
18)『Chinese Repository』で次のように表現されている。

The fables before us, now for the first time in a Chinese costume, have been selected from Sir Roger L'Estrange's collection, (Vol. VII, Oct. 1838, 335p)

A portion of these fables has recently appeared in a Chinese dress, and has been well received; (Vol. VII, Dec. 1838, 403p)

19) This Style comes under the class of 編録, being 文字末 or lowest and easiest style of Chinese composition. (By making himself master of this style, the Student will find little difficulty in understanding the various 小説 or popular novels of the day, and it may serve as a stepping stone to much higher literary attainments.)

20) Francisco Varo はスペインのドミニョ会の宣教師であるが, 『Arte de la lengua mandarina (官語文典)』(1703)において「官話」の文体に3つのモード（口頭語としての文語, 文語・口語の混交体, 普通の口語）があることを述べている。これについては吉見昭弘1996, 1998年にある。

21) 「白話」と「文言」を分けるいくつかの「鑑定語」については, 雅洪托夫の「七至十三世紀の漢語書面語と和語」（『漢語史論集』北京大学出版社, 1986年版）で示されているが, 筆者の考えところとはほぼ一致している。ただ今回は時間の関係で全ての語の頻度数等の調査は間に合わなかった。後日, 語発表と共に提示する予定である。

22) トームは英文序で次のように述べている。

When first published in Canton 1837–38 their reception by the Chinese was extremely flattering. They had their run of the Public Courts and Offices—until the Mandarins—taking offence at seeing some of their evil customs so freely canvassed—ordered the work to be suppressed.

つまり, トームのイソップは官吏を含む中国人に大きな歓迎を受けたが, その後禁制になったというのである。この点について, 周作人はこう述べている。

以前, 明訳イソップのことについて述べた時, 1840年に出版された『意拾雑引（もと意拾雑引一筆者）』に触れたことがあるが, 最近, 英国の Jacobs の「イソップ小史」を読んで, この『雑引』に関する一つの小さなエピソードを知った。彼の Morris が「Contemporary Review」第39巻で発表した文章を引くところによれば, 『意拾雑引』は出版されるとたちまち流行し, みな興味津々に語り合った。その後, 一人の役人の知るところとなり, 「これはまさに我々のことを批判しているにちがいない」ということで, すくさまこれを禁書書目に入れるように命じたというのである。この話は, おそらく事実ではないように思われるが, すこぶる興味がある。『意拾雑引』は中英合璧（＝対照）の洋装の小冊子であり, 教会などの付属機関の発行したものであ
関西大学『文学論集』第49巻第1号

るが、現在の「講壇会」の販売方法などから考えても、その価格はそれほど高いくらいではない。従って、Paul Carus が『支那哲学会』を創設したのと同じように、もし著者自らが送り届けることもしない限り、人に知られることは容易ではなかったはずである。ましてや、役人にどうかして『意拾説引』を愛読したとは、到底信じられない。西洋人人はきまって、中国を「アラビアンナイト」の中の一帯の場所としてとらえたりするものであって、時にはとんでもない見方をするのである。ただ、この話の最も重要な部分は『意拾説引』がかつて本当に禁書になったか否かということであるが、残念ながら現在では調べようもない。（周作人『再闘観伊索』『自らの園地』1923.9初版、1927.3十版、北新書局、198—199p）

周作人はこのように「禁書」については掲載的であるが、トーム自身も述べているし（1881年に発表された Morris の文章は実はトームの序によっている）、当時の『澳門新聞紙』（1844年6月20日）にも同じような記述がある。

依藤札記原係士西所譜記英吉利字　今在本禮拜內　印出為中國字………於一千八百三十七三十八年　當此書初出之時　中國人甚頌美之　後又入之官府手內　官府見其中所著之事多有刺他們之惡規矩　遂出令禁止之

もちろんこの記事は同月の The Canton Press のイソップ紹介記事を中国語に訳したものであるが、もし「禁書」が全くのでたらめであるならば、翻訳者（おそらく林則徐や魏源の周囲のもの）ほんは書かなかったと思われる。「禁書」に関しては John Francis Davis『Chinese miscellanies: a collection of essays and notes』（London, 1865）にも記載があるが、ここではこれ以上は触れることにする。

なお、『澳門新聞紙』は方漢奇1991年に以下のようにある。

为了了解外国侵略者在华的动态，林则徐在广东禁烟斗争期间，在他的幕僚魏源的协助下，曾经派人从外文报刊中，选择出一部分新闻和评论，以供参考。这种外报的中译本当时称作“澳門新聞紙”，每週或每月抄報一次。（15p）

魏源的『海國圖志』（100卷本，1852）の巻81—83の『夷情備采』の『澳門月報』の記事の多くはこの『澳門新聞紙』から採られている。上記のイソップの記事はその『澳門月報一』に収められているが語句にかなりの異同が見られる。

23）『東西洋考每月統記傳』を発行した「在華實用知識傳播會 (the Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China)」はトームの書を、彼の了解の下で、この協会の出版物として出版したことがあるという。

The publication has, with the kind permission of the proprietor, been placed upon the list of works of this Society, (The Chinese Repository 1838, 403p)

このことに関して、顧長寧1991も「在華實用知識傳播會」の活動を述べた部分で「把別人出的〈伊索喻言〉翻譯本拿過來算是該會的出版物」と述べている。ただし、いずれも1838年の記述であり、後述の『意拾説引』のことを指している可能性が大で
ある。
なお、『意拾餘言』は、『Chinese Repository』(Vol. XIII, Feb. 1844) のウィリアムズの総編訳事によれば、その後、1843年に福建語と広東語の音注が附せられたもの、シンガポール (Singapore Mission Press) で出版されている。福建語は Dyer、Stronach によって漬州音が、広東語は Stronach により潮州音が附されて、Part I が福建語で 40p、Part II が広東語で 37p である。福建語のものは東洋文庫モリソン文庫に収められており、それによると漢字はなくてローマ字表音だけであるが、広東語のものは未見である。ただし『Chinese Repository』の記事の中に、「毒蛇咬鈍」のページが載せられており (102p), 絵図で漢字の右側に音注が付けられている。また最後の「慎之」という語が欠けていた以外は『意拾餘言』との語句の異同は見られない。

24）『東洋考每月統記傳』はドイツ人宣教師ギュツラフ（Gützlauff）によって道光癸巳（1833）年六月に広東で創刊された新聞である。その後、途中、甲午（1834）年五月以降の休刊を経て、道光乙未（1835）年正月から六月まで刊行後、再び休刊。道光丁酉年（1837）正月に復刊後、道光戊戌（1838）年まで刊行。停刊が戊戌の何月か確定できないが、少なくとも九月までは刊行されていた。なお、1837年以降は「在華實用知識傳播會」(the Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China) にその編集は委ねられ、発行地もシンガポールに移された。

25）筆者は、拙稿1994において「1840年以前に『意拾餘言』はすでに作られていた可能性があるわけですが（あるいは『毎月統記傳』に連載されたのかも知れませんが）、と述べておいたが、どうやらこの推測はそれほど外れなかったようである。

26）これは澳門政府の公報であり、『Repository』の説明によると 1838年 9月 5日に創刊されたとある。

The Boletim Official, the first No. of which appeared on the 5th of September, takes the place of the Macaista Imparcial and the Chronica de Macao, both which have ceased.

これに関して、戈公振の『中國報業史』では次のように言う。

The Boletim Official de Governo de Macao (譯意澳門政府公報) 発刊於1939年1月 9日。自第 2 期起，易名 Gazette de Macao. (84p)

この発刊年はまぶん戈の誤りであろう。

27）ダグラスの『補遺編』にも次のように見える。


4巻で、David. Thom からの寄贈によることも、版型も、今回入手した『意拾餘傳』に一致する。ただ、「Nine fables」というのがよくわからない。実際は 9 話だけ
28) 12—31は、計算では全部で20話にしかならないが、すでに前述の通り、31が重複しているから21話ということになる。

29) Roger L’Estrange (1616—1704) のイソップ英訳本初版は次ものである。
『Fables of Aesop and other eminent mythologists: with morals and reflexions』
なお第2版は1696年に出版された。

30) ただ実のところ、記事のこの部分には少し疑問もある。

His last number is decidedly superior to its two predecessors; it contains twenty-four fables; the first is, the man and his wooden god; the second is, the wagoner and Hercules.

24話収められていて、最初が「the man and his wooden god」というのは大英本に同じなのであるが、2番目にされる「the wagoner and Hercules」は、大英本では第3巻の最後に置かれているのである。ただし、これを『Chinese Repository』の記事の誤りと考え、その後の「in the last, for example, Buddha is made—and without much violence—to act the part of Hercules.」だけを見た場合、辻褄は合う。ついてに言えば、このヘラクレスを仏陀に演じさせたことについて、前掟1989では「やや奇抜の感をまねかれぬ」と述べるが、この記事の執筆者は「それほどの違和感もなく」むしろ「優れた訳」と見なしている。

31) マカオで出版された可能性を残す、もう一つの気になることがある。それは、手書きの「叙」に見える「漢洋字典」という葉書である。モリソンの字典を述べた箇所であるが、『意拾喩言』でも、その後の『伊啓善喩言』でも、「華英字典」あるいは「英華字典」とあるところであるが、何故か「漢洋」が使われている。当時の中国語では「西洋」、「洋」はポルトガルを指すことはよく知られている。たとえば、コンサルベスのポルトガル語イニーズ字典は「漢洋合字典」という漢字タイトルが付く。「漢洋字典」としたのは、ポルトガル＝マカオを意識したものであるかも知れない。

なお、David Thom の前に紹介した文書にも以下のようにある。

“Esop’s Fables translated into Chinese.” This like the former published under the pseudonyme of “Sloth.” There have been two editions of this work. The former published 1838, contains the bare text. Its appearance created a great sensation at Canton. The latter is a beautiful work, published 1840. It has preface note translation, pronunciation, &c. &c.

David Thom も『意拾喩言』の最初の版は1838年に出版されたと述べている。従って、1837年から1838年というのはやはり問題がある。
また大英本には David Thom による書き込みがあって、それにとどると、第 3 卷と第 4 卷は 1840 年 2 月に David Thom によって大英に寄贈され、Robert Thom によって 1839 年に翻訳されたとする。一方、第 1 卷と第 2 卷には 1839 年 5 月に寄贈である。いずれにせよ、1837 年に出た可能性は非常に少ないものである。

32) 「施医院」についてはその後の調べで、Medhurst を始めとして、以下のように数種の英語字典に Hospital の訳語として使われていることが分かった。つまり「一般名詞」であることが明らかになったわけである。

Medhurst『English and Chinese dictionary』(Shanghái, 1847)
Hospital 普濟院、施醫院、醫館、醫局、濟病院
a hospital for lepers、病院
hospital for the blind、瞽目院
hospital for the aged、老人院、養老院
hospital for the destitute、棲流局
a foundling hospital、育嬰堂 (I—680—681)

Doolittle『A vocabulary and handbook of the Chinese language Romanized in the Mandarin dialect』(Fuochow, 1872)
Hospital: for the sick、醫館、施醫院、濟病院 (Part I—240p)
Hospital or alms-house for the poor、普濟院
for the destitute、棲流局
for the blind、瞽目院
for the aged、養老院
for the foundling、育嬰堂

このように Doolittle は他の Hospital に関する語彙もほぼ Medhurst を踏襲していることがわかる。

Baller『An analytical Chinese-English dictionary』(1900)
Shih 施醫院 or 醫館 a hospital
MacGillivary『英華成語合璧字集』(1930)
shi-h-yuan 施醫院 a charity hospital

面白いことに、この辞書は Stent を元にしているはずだが、肝心の Stent にはない。

なお、「病院」は Hillier 『English-Chinese Pocket Dictionary of Peking colloquial』(1910) に見える。

また王翔の『漢唐雜志』(1875) にははっきりと「施醫院」は「仁濟醫院」であると示されている。

施醫院即今仁濟醫館也，與墨海聯盟，專治華人疾患，主其事者，為西醫羅理雅刀圭精手，西人於醫學最嚴，必先於國中考核無訛，然後出試其僱，懸以疏唐殺人也，⋯
この「仁濟醫院」からは合僧氏の『西医略論』(1857)，『婦科新説』(1858)，『内科新説』(1858)が発行されているが、印刷はあくまでも墨海書館であったはずである。

なお、余談であるが、宮永孝『高杉晋作の上海報告』(新人物往来社1995、3.10)では、高杉等が訪れたミュアヘッドの場所を「城内」とする。しかし、これは恐らく誤りであって、常居する所は、城外の教事と病院であったと思われる。高杉の日記の個所はそう読むべきであろう。この点、さすがに増田1979の読みは正しい。「高杉や五代や中牟田がキリスト教会堂に常居する蔵書庫を訪れたのは……」とあり、「常居する所に訪れた」と読んでいる。(増田1979、30p)

33) ただ前述の「意捨秘」との関係はなお解決されていない。
34) いま前坊1899に示された写真による。
35) 鈴木1927によれば村山徳淳訓読による「訓読伊婆普喻言」もあるというが筆者は未見。
36) この「文裕堂」とは『循環日報』内の書籍の編集、印刷、販売を行う機関であったと思われる。たとえば、胡鍾恒撰『新政論議』(1895)は「香港文裕堂」の出版である。卓南生1900によると『循環日報』の創刊は、同治十二年癸西十二月十八日(1874年2月4日)であるが、前身の「中華印務局」のその他の営業活動は引き続き行われていたという。その営業内容は卓によれば以下のものである。

① 中華印務局は引続き顧客のために中文・英文の書籍、広告、海外新聞、各種の契約・文書などの印刷を行っていた(初期の『循環日報』にはほとんど毎日その関係の広告が掲載されている)。
② 書籍、辞書、洗髪料、強壮剤など各種の丸薬・飲薬などの販売。
③ 内、中、小各種類の鈴活字の販売。(249－250p)

おそらくこの3つの業務が「文裕堂」によって行われていたものと考えられる。
なお、この図書の図には「各種書籍及び梁森華本出資」の欄(同治13年正月初九日)があり、そこにも「伊婆普喻言」などが挙げられている。

37) 『華英通語』は日本で福沢諭吉によって『増訂華英通語』として1860年に刊刻されたが、原書が如何なるものか、著者と言われる「子卿」が如何なる人物かはまだ解明されていない。実は、これは中国で出版された版本が存在する。ハーバード大学燕京図書館蔵であるが、それによると「西賢藏書茂蔵本」で、著者は「子芳」となっており、序文も「何紫庭」ではない。「西賢藏」は香港の英華書院近くの地名であるが、中華印務局の出版物としてその名があげられているところから考えると、原書の「華英通語」は恐らくは英華書院で発行されたものである可能性が高い。これも今後の大きな課題である。
38) ここで戈は「伊婆普喻言」と言っているが、「伊婆普」と「伊婆普」の誤りである
「伊索寓言」というのはこれまで見たことがない。

39）方言訳イソップも（註23）で触れられた福建語、広東語以外に、廈門語、上海語のものも出版されている。廈門語のものは筆者が見たもの（1885年、1893年）はいずれもローマ字のみである。上海語のイソップについては『Catalogue of publications by Protestant Missionaries in China』（1876）や Wylic1867 に Cabniss によるものが示されている。1857年出版の出版で、Crawford による上海標音文字によるという。

40）このようにイソップが中国人の英語学習用に使われた例としては、以下の記述にも見られる。

西元1864年1月、李確士（E. J. R. Willcocks）從英国到港任中央書院英文教員。於西元1865年，將英文科變為必修科，第一班（Class 1）的翻譯科，要求學生將伊索寓言及孟子翻譯為英文。
（方美賢『香港早期教育發展史』25p 中國學社 民國64年3月）